

機関番号：14101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530851

研究課題名（和文） 音楽的経験の諸段階と感性の様相変容

研究課題名（英文） Modal transformation of stages and kansei in musical experiences

研究代表者

根津 知佳子 （NEZU CHIKAKO）

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：40335112

研究成果の概要（和文）：

本研究では、感性を「履歴を持つ空間で身体の配置を捉える能力」「環境と身体的自己との相関関係を感じ取る能力」と捉えなおし、“音楽的経験”の類型、構造および感性の表出に関する調査・分析を行った。同時に、これまで筆者が開発した分析方法とモデルの改善を図った。以上から、“音楽的経験”の類型および段階を重視したカリキュラム構成の可能性を見出すことができた。

研究成果の概要（英文）：

This study examined and analyzed the types, structures and expressions of kansei with regard to “musical experience,” by taking kansei to mean the ability to perceive “one’s physical presence in space and time” and the “correlation between oneself and one’s surrounding world.” It additionally served to improve the analytical methods and models. Results have indicated the possibility of building curriculums around types and stages of “musical experiences.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：教科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：感性、音楽的経験、音楽的対話、暗黙知、形式知、構造、フレームワーク
Williams Syndrome

1. 研究開始当初の背景

『感性システムの構造化と音楽的対話における「知」の分析（平成 18-19 年度採択 18530698）』において、椎塚久雄らの提唱する知能システムに“暗黙的-形式的”という

軸を加えたフレームワーク（三重大学 COE(B)2005）を考案し、“音楽的対話”における変換プロセスをフレームの象限として示し、様々な発達段階における“感性”や“臨床知”を可視化することを試みた。

人間のひとつの機能(function)としての感性を抽出し、より人間に近い工学の実現を目指す感性工学領域に対し、教育実践では、対象者が“感受したコト”を音声・文字・記号・絵・音などの“形式的なモノ”に変換するプロセスそのものが重要となる。したがって、言語的行為・非言語的行為の輻輳した営みにおける“形式的-暗黙的”の軸の双方向性をさらに検討することが急務であった。

2. 研究の目的

本研究では、“音楽的経験”の深層構造と表層構造を明らかにすることを第一の目的とした。さらに、感性の様相がどのように変容するか可視化することを第二の目的とし、そのための記録・分析方法もあわせて考察した。

3. 研究の方法

本研究は、感性工学や感性哲学における先行研究を基盤とし、桑子敏雄(2002)の「履歴を持つ空間で身体の配置を捉える能力」「環境と身体的自己との相関関係を感じ取る能力」という感性の定義に依拠し、次の2つの方法に基づいて遂行した。

- ① Kenneth. E. Bruscia (1998) の言及する音楽的経験・前音楽的経験・外音楽的経験・準音楽的経験・非音楽的経験の諸段階を具体化する。その際に、過去に開発した分析方法(根津、1993, 1996, 1999)の改善も行う。
- ② 様々なライフ・ステージの対象者との“音楽的対話”の実践分析を通して、実践者(指導者、セラピスト、保育者、療育者)と対象者が現実の文脈の中でどのように“感性”を捉えているかを可視化する。

4. 研究成果

(1) 新たな感性の視座

まず、平成20年度には、平成14年度より手がけているWilliams Syndromeの芸術プログラムの音楽的経験について再検討し第40回日本芸術療法学会にて口頭発表を行った(学会発表⑤)。Williams Syndromeは、第7染色体の微小欠失による突発的な遺伝子疾患であり、10000~20000人に一人の発症率と言われている。Williams Syndromeの音楽的才能に着目した米国の芸術キャンプ(2002-2008)やアイルランドのキャンプ(2007-2008)を参考にしつつ、引き続き日本の文化や実情に即した芸術プログラム(2002-2008)の在り方を模索した。これまでも豊かな表出性および共感性をWilliams Syndromeの表現行為の特徴として捉えてきたが、音楽的空間での“間合い感覚”に敏感であることを“感性”という視座で論じ、

Williams Syndromeの音楽的能力を、音楽的空間における“間合い感覚の鋭敏さ”と捉え直した。また、Williams Syndromeの表現行為における“感性”を理解するためには、桑子敏雄の言及する「履歴を持つ空間における身体の配置」という視点へと広げる必要があり、さらに、“身体の配置”を組上に載せるためには、第7染色体の欠失した情報と芸術(音楽)との関連性を追究することが不可欠になることを論じた。

(2) ミクロ分析やモデルの機能

筆者は、20数年にわたり“音楽的対話”に着目した実践を行い、その構造をミクロ的に分析する方法を検討している(図参照)。

また、音楽的発達と音楽的認知をマクロ的に捉えたモデルについて、Piaget、Bruner、Swanwickらを援用し、提示してきた(根津、1997・1999・2000・2004)。

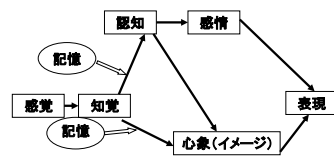
第4期の音楽的相互作用の例(1996.7)

セラピストの観察と反応	ミクロ分析	クライアントの反応
情緒的に不安定なため、ピアノの鍵盤の下で腕を揺らすように、腕の動き(「ササ」)を覚える。	→	ピアノのペダルを踏んで振っている。
クライアントの反応は「腕を揺らす、音を聞かせる」として、やりとりを繰り返しようとする。	→	「ササ」を繰り返して、腕の動きも手首に結びつける。
I. クライアントが好きなリズムをピアノで繰り返す。腕を揺らす。腕の動きが止まる時は、リズムの繰り返しが止まる。クライアントが腕を揺らすのを止める。	→	「ササ」は、通常に乗って安全な音、あるいは安全な音で、ピアノの鍵盤の下で腕を揺らす。腕の動きが止まる時は、リズムの繰り返しが止まる。
II. クライアントが腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。	→	少しリラックスするが、リズムを繰り返す。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。
III. クライアントが腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。	→	「いい音やな」と言って手を動かしながら、ピアノの鍵盤の下で腕を揺らす。腕の動きが止まる時は、リズムの繰り返しが止まる。
IV. 腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。	→	腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。腕を揺らすのを止める。

ミクロ的な分析は、実践者と対象者の水平的な関係、マクロ的なモデルは両者の垂直的な関係を可視化するためのツールである。

本研究では、Bruscia(1998)に依拠し、様々なフィールドで音楽的経験・前音楽的経験・外音楽的経験・準音楽的経験・非音楽的経験の5分類に関する調査・実践を行った。

特に、次に示すモデル(都甲2004を改変)に基づいた分析により、「履歴を持った身体が外界を捉える力」の対象が、“音響としての音楽”“知覚の対象としての音楽”“構造をもつものとしての音楽”“意味および内容をもつものとしての音楽”の段階に変容することがわかった。これによって、これまで開発したモデルの有効性を検証することができた。



(3) 音楽的経験の深層構造

平成 20 年度には、マクロ的・ミクロ的モデルの基盤となる深層構造について、“磯笛”を事例としてまとめた(業績⑨)。さらに、平成 22 年度には、ヒトとヒトの感性情報処理にとどまらず、動物やロボットを介した実践の構造についてまとめ、口頭発表を行った(学会発表①)。

まず、前者について述べる。日本音風景 100 選のひとつであり、伊勢志摩に伝わる“海女の磯笛”は、海女の呼吸調整の音であり、本来は音楽的意図や意味性を持たない行動(非音楽的体験)である。ところが、背景となっている海や風の自然音(前音楽的体験)と情景(準音楽的体験)、海女に内在する物語性(外音楽的体験)などの作用により、聴き手は物悲しいメロディーとして聴こえる体験をする(音楽的体験)。つまり、聴き手は、「楽器=笛」に見立てたり、「物悲しい」という情趣を感じ取ったり、積極的に受動的な音楽体験をしていることになる。これが、“磯笛”の深層構造であるが、楽音ではない音に対して、その音色や旋律に「物悲しさ」という情感や意味を付与し、音楽と捉える点は、“音楽的対話”の構造と類似している(業績⑨)。

この構造は、動物やロボットなどを対象とした活動構造とも共通している側面があることを芸術療法の構造と比較して報告した(発表①)。動物療法については、古くギリシャ時代に記録が残っていると言われていたが、心理療法のひとつとして位置づけられるようになったのは 1960 年代であり、科学的な検証について取り上げられるようになったのは、1990 年以降とその歴史は浅い。一方、ロボットを介した活動については、1999 年に登場した AIBO やパロが実践現場で活用されるようになってから、急激に開発が進められている。

いずれの活動とも対象(ロボット・動物)との相互作用を通して、人間が本来有するいろいろな感情を誘発し、精神的に癒されることを目的としたものであり、次のような構造を持ち、三項関係が成立している例は少ない。



一方で、芸術療法の、言葉、絵画、音楽、ダンスなどの芸術的経験において、他者と共に作品を再統合・再構成する営みである。三項関係の成立は前提条件であり、重要なことは、芸術的経験で再統合・再構成されるのは、自己でもあり他者との関係性でもある。こういった場で重要なのは、“間合い感覚”と“身体感覚”である。

人間

人間以外のモノ → 取り入れ(現実: ファンタジー)

相対化

芸術療法の場

↓

表現

言語的交流

非言語的交流

↓

再構成 再統合

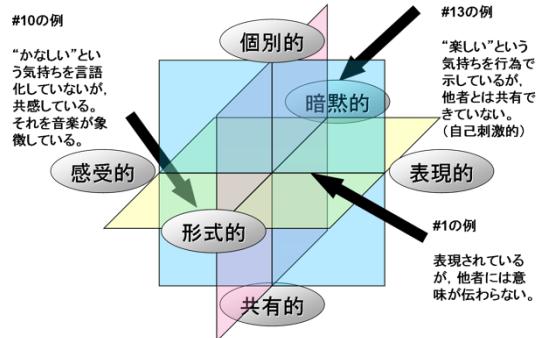
芸術療法においては、言語的・非言語的な交流を通して、対象者の表現に内在する無意識の世界を読み取っていくことになるが、表現を自己、あるいは他者との関係性を象徴するモノとし、どのように解釈するかが重要になり、実践者の感性が問われることになる。

(4) 音楽的経験の表層構造の変容

“音楽的経験”は、非言語行為が多く、記録作成に困難をきたすことが多いが、エピソード記述の蓄積によって、その変容を紡ぐことができる。例えば、次に示すエピソード記述を経年的に蓄積し、フレームワークのある象限として位置づけることにより、変容を俯瞰することができる(業績⑧)。

【#13. 共有できない 楽しい気持ち】

「じゃあバイバイしようか」と言うと、Mくんは「ぐるぐる回るから、みんな手をつないで!」と指示する。ピアノが始まると、ものすごい勢いでまわり始める。天井のライトやスタッフの動きを見て楽しそうに笑っているが、徐々に音楽やスタッフの存在とは無関係になっていくようだった。彼の動きは自己刺激であると判断し、ゆっくりと反対まわりにするように促した。Mくんは、まだその場に余韻が残っていることとは無関係に、「あ一目が回る」と座り込む。



(5) 隣接関連領域と音楽的経験

本研究においては、幼稚園における飼育動物とのかかわりでのうたの創出(幼児教育との協働=業績②)、科学の祭典のテーマソングの創作(理科・技術との協働)、校歌の制作過程における聞き取り(国語・美術との協働)など、音楽表現と言語活動を連関させる

プロセスや他の教科とのかかわりまでフィールドを広げて音楽の果たす社会的機能を確認することができた。

その他にも、教育の隣接関連領域における実践を通して、乳幼児から高齢者までの様々なライフステージにおける感性の様相の変容を抽出することを試みた（業績①②③④⑥⑧⑩⑪）。

今後、“音楽的経験”を軸としたカリキュラム構成について、下記のような視点を加えて研究を進める予定である。

前音楽的経験

生活科の学習内容との比較

外音楽的経験

国語・保健体育などの表現教科との比較

準音楽的経験

美術・技術などの教科との関連

音楽的経験

理科・数学・社会などの教科における音・音楽の取り扱い

以上により、“音楽的経験”の類型および段階を重視したカリキュラム構成の可能性を見出すことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 21 件）

- ① 根津知佳子：教室の感性「感性とフィールド」、東信堂、査読有、第7章、2011、pp. 125-138 (印刷中)
- ② 滝口圭子・根津知佳子・後藤太一郎：幼稚園におけるウサギとの生活に関する実践的考察：歌「うさぎのうーちゃん」の協同的構成、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無、第32号、2011、pp. 7-12
- ③ 根津知佳子：教育における感性の今日的課題—学習指導要領における記述から—、日本感性工学会誌、査読無、Vol. 10 No. 1、2010、pp. 27-30
- ④ 根津知佳子：音楽療法と感性工学の接合、日本感性工学会論文集、査読有、特集「音楽療法」、Vol. 9 No. 1、2009、pp. 86-91
- ⑤ 山脇一宏・根津知佳子・椎塚久雄：音楽療法と感性、『電子情報通信学会誌』、日本電子情報通信学会、査読無、92巻11号、2009、pp. 996-997
- ⑥ 高林朋世・根津知佳子・森脇健夫：エピソード記録の重ね合わせの可能性、三重大学教育学部研究紀要、査読無、第61巻、2009、pp. 305-317
- ⑦ 根津知佳子・前原裕樹・松本金矢・中西良文：学生開発型ものづくり授業実践にお

ける「対話」の研究、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無第29号、2009、39-45

- ⑧ 根津知佳子・松本金矢：教育実践における感性のフレームワーク、日本感性工学会論文集、査読有、8巻-1、2008、pp. 73-80
- ⑨ 根津知佳子：継がれる感性、『感性哲学—育む感性—』、東信堂、査読無、8巻、2008、pp. 37-44
- ⑩ 根津知佳子：心と音楽 ～こころの鏡～、音楽文化創造、査読無、50号、2008、pp. 16-19
- ⑪ 森脇健夫・根津知佳子：授業研究としての「アクションリサーチの試み」II、三重大学教育学部紀要、査読無、第60巻、2008 pp. 287-302

〔学会発表〕（計 5 件）

- ① 根津知佳子：芸術療法と動物療法、日本感性工学会感性哲学部会、2011年3月4日、九州大学
- ② 森脇健夫・根津知佳子：教員養成型 PBL 教育の課題と展望 V—学びの履歴から照射される学生の変容—第 16 回大学教育フォーラム 2010 年 3 月 19 日、京都大学
- ③ 森脇健夫・根津知佳子：教育実践の質的研究の射程とアプローチ—記述データによる「観」の照射の可能性を求めて—、第 6 回日本質的心理学会、2009 年 9 月 13 日、北海学園大学
- ④ 根津知佳子、森脇健夫、松本金矢：教員養成学部における PBL 教育の意義”、第 15 回大学教育研究フォーラム、2009 年 3 月 20 日、京都大学
- ⑤ 根津知佳子：Williams Syndrome の表現行為と感性、第 40 回日本芸術療法学会、2008 年 9 月 20 日、明治大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.chikakotsukioka.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根津 知佳子 (NEZU CHIKAKO)
三重大学・教育学部・教授
研究者番号：40335112

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：